

中 支

湘桂作戰初年兵の思い

愛知県 渡辺 久喜

中国大陸湖北省の浙河鎮もようやく春も終わりを告げ、初夏のおとずれか、楊柳も日増しに青さを増している。そんなある日、新品の衣服を支給され真新しい軍靴も支給され、そのうえ、驚くなかれ、各人遣髪または爪を私物と一緒に分隊ごとまとめるようにとの伝達である。万一の場合の遺品である。そうして、懐かしの浙河を二度と帰ることのないであろう軍の指令のもと、出陣したのである。

この作戦こそ、大陸縦断とも打通作戦ともいう湘桂作

戦である。海上封鎖されて南方の軍需物資を陸路輸送するための鉄道確保が目的だったが、当時、兵は目的も行く先もわからず、ただ命令のままに行動するだけである。

出発して二か月、湖南省の田園地帯でのことである。七月中旬といえば中支も雨季がおわって、連日やけつのような猛暑である。汗は軍衣を通して塩の結晶となり白い地図模様をえがいている。そうしたなかにも稲田のみは恵みの太陽の下、緑と繁みを増して、のどかな田園風景である。農家出身の兵隊は重い軍靴を引きずりながら、遠い故国の親や妻や、そして稲田のことなど、思いめぐらせていたことであろう。

しかし、それもつかの間、やがてこの水田の上の小高い丘のうえで地獄絵巻がくりひろげられたのである。お

りしも超低空でアメリカのグラマン五機が突然襲いかかってきたからたまらない。瞬時のことで、地面に伏せると同時にダダダダと機銃掃射をあげたのである。弾着が近く砂ぼこりと小石が前や後ろや左右に降りかかり、同時に、熱い風圧で地面におさえつけられたような熱風を感じたのだった。

もうやられると思つた瞬間、今度は顔の前に葉莖がバラバラ、キーンと金屬音を立てて落ちてきたのである。ほんの三、四秒の出来事であるが地面にへばりついて動けず、しばらくして助かつたと思うと急いで人員掌握にかかると。分隊長異常なし。やれやれ一安心だ。

しかし隣の部隊からは異様な空気、ざわめき、人と馬の重苦しいうめき声が聞こえる。だれか戸板を早く探してこいと叫ぶ声、馬が倒れて腹に大きな穴があいて内蔵がとびだしている。馬は目を開いてなにかを訴えるみたいに悲しい目をむいていた。物いわぬ戦士のかなしい最後である。戸板の兵も片腕を引きさかれて弱々しいうめき声で、まさに断末魔の姿。まわりの兵も手のほどこしようになく、だまって見守るだけ。なんの手当もできな

いままに、彼の最後を見守るだけであつた。

後続部隊はこの場面を横目に、どんどん行進を続け、軍靴の音と砂塵を巻き上げ通り過ぎていく。前進あるのみである。戦死者はその場でだびにもできず、手の指を切断して、次の宿営地までいく。そして夜陰にまぎれて焼くのであるが、それも急いで始末をしないと、その火が敵の目標になるから、ゆっくりしてられない。

こうした生活からだんだんと自分の気持ちのうえに変化が起きて、毎日の出来事に無感動な、そして冷酷な人間へと変身してゆくのである。頼れるのは自分自身の精神力のみ、他人をかまっていたら、それこそ自分が倒れてしまうからだ。くる日もくる日も敵味方の死を見つめ、処理をさせられ、明日は我が身か。だれが保障できよう、これが戦場のおきてでもあるからだ。毎日が地獄の一丁目をさまざまに、肉体と限界との戦いでもある。

もし自分が落後しようものなら、だれも手を取って助けてはくれない。助けようにもそれだけの余裕がないからだ。そして部隊から離れようものなら、たちまち部落

の土民になぶり殺されて、行方不明者となってしまうわけだ。

夜半に部落をみつけ、やれやれと飯ごう炊きで腹ごしらえをして、そのまま仮眠をとり翌朝クリークをみたら死体がポカポカ浮かんでいた、なんていうのは当たり前のことである。死体のそばの水で炊事したことが分かり、道理で昨夜の飯はよくだしが出ていたなあ、なんて冗談をいってけろりとしている。それくらいの神経になるのである。いや、ならなければつとまらないのである。

この湘桂作戦に私たち昭和十七年徴集現役兵は、初年兵として終始最下位の身分で活躍したわけである。従って多くの戦友をこの異国の地に失っている。初年兵なるがゆえに、隊の下働き要員として炊事洗濯、また馬の手入れはもちろんのこと、それに加えて敵前歩哨、不寝番等、文字通り不眠不休の酷使に、過労から力つきて病に倒れてしまったのである。

兵隊の命も自分のものでない。命令と服従の社会、いかなる無理難題も、うえの者の命令は、絶対であり、自分の持つ体力のすべてを出し尽くして死んでいったの

だ。

命令と服従は軍隊の命である。もちろん古参兵も一度は初年兵の過程を通ってきているわけであるが、忠節という価値観も長年のうちに、うまく形式化して自分らの特権をもって要領という言葉にすりかえてしまう。服従という至上命令すら、要領という技術と、年次すなわち飯の数で初年兵に転嫁させてしまい、保身を図る。初年兵は絶対命令なるがゆえに休む暇なく、一年有余の大作戦に、自分の力の限りをつくして倒れるものが多かった。

中国における私の歩み

誠心は必ず通じる

滋賀県 中村 文雄

私は大正十一年、八反歩の小作農家の長男として生まれ、兄弟は姉三人で、一人息子として可愛がられて育ちました。小学校を終えて高等科に進学、この時より私の